

エンカウンター (ENCOUNTER)

第245号

2022年9月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第2の手紙講解説教」より（1）

第2の手紙が書かれた理由

コリント人への第2の手紙がどういうものであるか、書かれた理由について簡単に触れたいと思います。

明らかになったところによりますと、パウロは大体4つの手紙をコリントに宛てて書いております。その第1の手紙はなくなっております。第2の手紙がいわゆるコリント前書であります。このコリント前書の反響というものが非常に悪く、この手紙に反発するという状態にありましたので、テモテを遣わしましたが、それでもうまくいきませんでした。そのため、パウロ自身がコリントに出向いたと想像されます。ところが、そのパウロ自身の訪問によっても、彼らの誤解並びに非難、反感を鎮めることが出来ませんでした。

パウロは失敗に終わった訪問からエペソに帰って来ましたが、そこで、第3の手紙（涙の書簡と言われる）を書きました。切々と自分の気持ちを書いた文であ

りますが、パウロはこの第3の手紙がどのように受け取られているか、非常に知りたがっておりました。それでパウロはテトスをコリントへ送り、その影響を知ろうとして、彼の帰りを待っておりました。しかし、その帰りが遅かったので、待ちきれずにパウロはマケドニアに渡り、コリントに向かっている途中でテトスに会い、報告を聞きました。それによって、この涙の手紙が非常に功を奏したことを知りました。即ち、彼らは自分の過ちを悔い改めて、パウロに対する尊敬を回復したのでした。

パウロは非常に喜び、…第3回目のコリント訪問のために手紙を書きました。それがこのコリント後書であります。そうですから、このコリント後書は非常に感情的な手紙であり、かつ、非常に個人的な手紙であります。まだ、自分に対する非難が全部解けているわけではないと思われまますので、それに対する弁明がその大部分を占めております。従って、ここには、理論的な教理は出て来ておりません。しかし、パウロの麗しき信仰の姿、輝き、きらめきをうかがい知ることが出来る。……学者によっては、この手紙は、2, 3の手紙の部分部分の寄せ集めであると言っております。しかし、個人的な手紙でありますので、パウロ自身が生き生きとして浮き彫りにされており、パウロ自身、即ち人間パウロが出ており、実に特色ある書簡であります。学者は、書いた場所は、恐らくピリピであろうと言っております。書かれた時期は、コリント前書を書いてから約1年後、即ち、紀元57年ころであろうと推測されております。

聖霊の結ぶ実

雑誌を買ったら付録が付いて来る。私も付録が欲しくて、本屋で百人一首のついた雑誌を買った覚えがあります。キリスト教も信じたら、そして、聖霊を受けたら、必ず、平安が付いてきます。聖霊の結ぶ実は、平安、愛、喜び、節制であるとパウロはガラテヤ書に書いています。そういうものがないということになったら、信者ではないということになります。クリスチャンは猛省する櫃というがあります。キリスト教が微力であるのは、牧師はじめ信者が分かっていないからであります。上級学校に入学するためには、夜も昼も勉強しますが、「恵み」というものが何であるかを勉強する人が一人でもおられますか。創価学会では、東大で法華経の勉強会を開いているそうです。しかし、同じ東大で、聖書の勉強を50名もの学生で続けているという話は聞いたことがありません。日本では、昔から仏教は法華経に代表されてきました。それを学生が真剣に学んでいることに私は大きな興味を持っています。

そういう意味におきまして、恵みと平安というのはクリスチャンの一枚看板です。

天国の書が、現世において力強い

私は、この 17 年間聖書を少しく学んで来ました。そして、その意味が少しずつ分かって来ました。これは、人間の書にあらずして神の書であります。この世の書にあらずして天国の書であります。この書が現世において如何に力強いものであるかが、この頃少しく分かって来ました。即ち、大きな付録があるという。「神の国とその正しきを求めよ、さらば、これらのものは汝らに加えられるべし。」と書いてあります。付録が大きいという。私は、真剣に聖書の勉強をせられんことを勧めます。特に、青年諸氏に薦めたい。この平安を知って、これを人に伝えることが出来たなら、その功德は言うべからざるものがあるであろうと思う。特に現世では、知識と物質ばかりを集めることに競合しておりますが、これらの中にはこの生命はありません。その証拠に、学者にして、本当に平安を持つ学者がおりますか。金持ちにして、真に平安を持つ金持ちがおりますか。知識や金(かね)を積んでも、生命と平安は来ません。 **A man's life does not consist in the abundance of his possessions.** (人の真の生命というものは、持ち物の多いことによっではない) のであります。

いかなる患難も慰めて下さる

神は、いかなる患難の中にいる時でも、わたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである。(コリント II 1.4)

コリント後書 1 章 4 節には、「神は、いかなる患難の中にいる時でも」とあります。これは、何たる慰めの言葉か。現世において、いかなる患難をも慰むというのであります。我々が慰められず、患難にへこたれているとすれば、これは信仰が分かっていないことになる。これは、勉強しなければならないという証拠であります。患難の種類は問いません。すべての、いかなる患難をも神は慰めるという。患難を持たない人は慰める力がありません。私達が慰めて頂く目的は、すべての悩んでいる人々を慰めるため、であります。パウロは、あなた方がいかなる困難にあっても、神が慰めて下さることを確信していると書いてあります。

10年後の感想——キリスト教の信仰は、難しい

この説教は私が考えた説教ではありません。これは、世界でも有名な、第1流の聖書注解者の意見を紹介したものであります。これは小西芳之助の説教ではない。字が読めて謙遜にそれを聞くということは、先生方の持つておられるものを自分のものにするのであります。

いつもいっておりますが、パウロの説いたキリスト教の信仰は大変難しいということでもあります。パウロが述べた場所、コリントにおいてすらパウロに反対する者が出ました。コリント前書を見て、それに対して、がたがた言っています。従って、パウロの説いた福音が如何に普通の人には受け入れ難いものであったかを証明します。キリスト教の信仰は、そう簡単にして易しいものではありません。非常に深く、難しいものであることを覚悟すべきであります。コリントにおいて、パウロの信仰を理解した人は真に少ないということです。俗人にはわかりません。

「我が主イエスよ」と称名し、永遠不滅の生命を感ずる

「慰め」に関する言葉は、コリント後書 1 章 3-7 節に 11 回、原語では 10 回出ています。従って、本日の説教は、「慰め」が中心となっています。「すべての患難から慰められる」とパウロは言っています。パウロは慰められたい。どうして慰められるかと言えば、「イエス・キリストによって」であります。イエス・キリストと言えば客観的なものです。これを自分に当てはめると、永遠の生命によって慰められたということあります。パウロに言わせれば、永遠の生命は、復活の望みです。我々は永遠の生命を頂く、という永遠不滅の復活の望みによって慰められたということです。すべての人生の苦しみから、パウロは、復活の望みによって慰められたと言っています。我々は、その永遠不滅の生命を、主の御名を呼ぶことによって、ヴィヴィッドに（生き生きと）感ずる事が出来る。我々は妄念によって、永遠の生命はもう隠れてしまっています。ですから、「わが主」イエスよと主の御名を呼ぶ、称名によって味わうことができるのであります。私は、この 10 年の間にそういうことが分かりました。

保証として御霊を賜った

「神はまた、私たちに証印を押し、その保証として、わたしたちの心に御霊を賜ったのである。」(コリントⅡ 1.22)

ここで、君達も私達も、神がイエス・キリストにまで我々を立てた、と言っています。我々は、信仰を自分で起こしたように思っていますが、「ノー」、神が分からせるのであります。内村先生は、「自分が信者となったのは、ひとえに、神の導きである」と言われました。内村先生だけではありません。信仰が与えられた人は皆そういいます、ここの「キリストのうちに」という「うちに」は、原語では「エイス」と言い、「ずっと中まで入る」という意味です。「イエス・キリストの中にまでずーっと引っ張り込む」という。

22節。パウロには、最後になると「御霊」が出て来ます。父、子、聖霊と言いますが、キリスト教では「神の霊」という字が出て来ます。キリスト教の奥義は、「聖霊」です。ここに三位一体論が出て来ますが、これは神学の説明ではありません。パウロが事実を説明している場所です。当時は荷物の安全の証明として証印を押し、保証として手付金を支払うという習慣がありました。時来たらば、必ず我々は復活するという神の恵みの一つの前払いとして、今聖霊を与えるというのであります。この場所は、ロマ書8章の繰り返しです。ロマ書とコリント前書を数年間ここで学びましたが、書いてある内容が全く同じであることに驚きます。

勝負は再臨の時にある

勝負はイエス・キリストの再臨の時にある、ということです。自分の手紙が真実であるということを証明するために、パウロは、イエス・キリストの日、即ち、再臨の日において、私があなたがたを誇りに思う如く、あなたがたも私を誇りに思うと。クリスチャンの勝負というものは、再臨の時にあります。

「我々復活する」ということは、パウロの中心的な望み、願い、永遠の冠であります。すでに、コリント前書で学びましたが、オリンピック競技において「駆ける者は多いが、彼らの求めている優勝は金メダルではないか。それは、朽ちるべきものではないか。我々は朽ちざる冠のために走っているのだ」と言いました。「永遠の冠」、これはパウロの原動力であります。自分の誠実を証明するときに、これが出て来ています。私が書いている諸々の手紙というものは、君達が復活する者となるために書いている、と。パウロの手紙の目的は、それです。ロマ書もコリント前書も同じです。

聖霊の結ぶ実

この自分の手紙は、君たちが信仰において喜びを得るのを助けるために書いている」と言っていることでもあります。「喜び」は聖霊の結ぶ実です。ガラテヤ書第5章において、パウロは、「聖霊の結ぶ実は、愛、平安、喜びである」と言っております。我々にこれらの「愛、平安、喜び」がないということは、信仰が分かっていないということです。牧師も信者もこの喜びがよく分かっていない。だからキリスト教が本当に人に迫らない。本当に分かったら、顔の相から変わって来ます。いつも苦虫をかみつぶしているような顔をしている人はキリスト教が分かっていない証拠です。…

本当の伝道者は、自分が信仰を教えてやっているという顔をしていません。大抵の牧師は、私も牧師になって17年になりますが、自分が信仰を教えているような、自分が信仰の手本のように思っています。本当の伝道者の姿は、「共に働く者」、君たちの信仰も私の信仰も神から頂いているのであるから、どうぞこの信仰を分かるようになって欲しい、と。それを助けるだけです。教えているなどとはもつての外です。教えるのは神です。神が真理の御霊をもって教えるのです。この聖霊を受けて、聖霊の実であるところの、「平安」、「慈悲」、「喜び」、「誠実」、「親切」そういうものを味わう者とさせていただきたいと思えます。